

繪本豐臣勲功記

初編

壹



櫻澤堂山編輯  
一勇齋國芳畫

花里火閃

# 繪本豐臣勲功記

初編

浪華書肆

群玉堂  
文海堂

叙

（印）

凡事自意外而來為之謂天授。自意中  
而出為之謂人為。人為則可以人力爭之。至  
天授則水火不能溺之。鋒鏑不能傷之。  
勇力智謀之將與之一對壘。其所施用  
皆出我意外。辟易挫衄。不知榮之所出  
焉。方天心之間。三綱解紐。羣雄割據。各  
相吞噬。時則有若織田右府。以英邁不

羣之資。起濃尾之間。扼海道之咽喉。謀士若雲。猛將若雨。駭之乎日。致強大。謂天下必定斯人。是豈非人之意中之所出乎。豐公起人奴。撥亂反正。混一四海。其所施用。盡出人之意外。况其當特擊茅鞋。以追隨馬前者。未幾進退將士。指揮羣牧。紫綬金章。躬為天子補相。以極人臣之位。其餘烈殘勳。震爆朝鮮。朱

明之外者。安知豐公非意外之幸乎。先是。有小說家。敷衍其義。以行坊間者。然文之與畫。頗乏精彩。使觀者有靴痒之慨。頃日有書賈甘泉堂。債友人德水子。更鮮明其文。錦繡其畫。省繁除冗。以謀梓行。德水偉其得益于童蒙。拮据經旬。每套十卷。加以繡像。使予一言。乃披閱之。豐公畢生偉勳。豐功躍然。

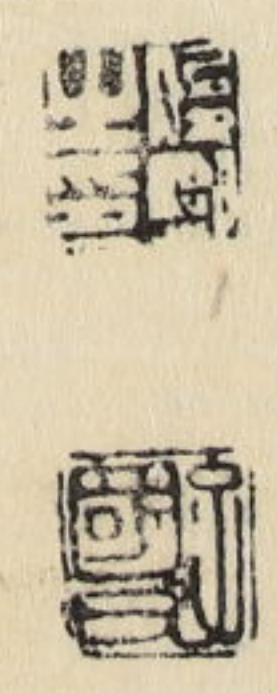
如見。殆有躬親探甲冑。與群雄周旋  
乎戎馬間之想也。是亦不吾輩意外  
之一快事乎哉。

安政二年乙卯蒲月

藤純撰



雪城居士俊峯書



豆駿遠  
四國領主  
今川治部大輔  
源義元朝臣之像



源義元朝臣之像



織田新臣  
木下藤吉郎高吉



尾張國守護職  
織田上總介平信長之像



伊勢國司

北畠大納言具教卿之像



北畠嫡子

左少將具房卿之像



稻葉山城主  
齋藤山城守利政入道  
道三之像

繪本豊臣勲功記初編卷之一

目錄

昌盛法師祈竹生島天女

附還俗僧胤

中村孫助昌吉仕織田家

附娶持萩女

日吉丸誕生於仲觀奇瑞

附 神童生長

日吉丸去鄉據身蜂須賀

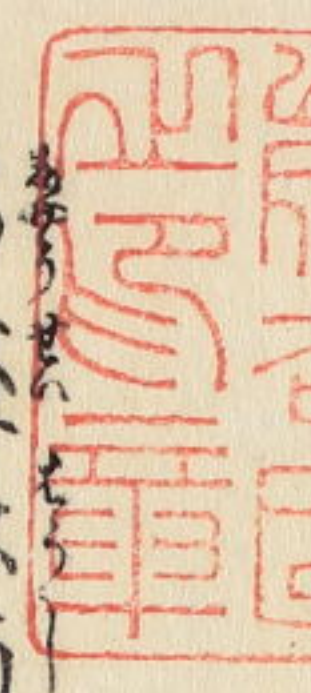
附 悍智奪刀

日吉丸一遍還故鄉中村

附 求食老母



繪本豊臣勲功記初編卷之一



江戸 八功社 徳水剛補

昌盛法師祈竹生島天女 属 還俗儲胤

四海の大用文武ふ過ぐるはれく。古今の智勇豊太閤ふ超ぐるはあじ。  
 芥も應仁の發乱より。元龜天正の朝中を于て、元龜の亂らぬ日、つららぬ  
 綿々として續々とて、修羅の苦刹ふ沈々とも豊臣國白秀吉公生を  
 田間茅舎小籠く、遂は扶桑の六十餘州、東陸西海、五畿七道、四十  
 餘年、欽均らげ、蕪葉復莖の葉樹を、應け割て外明を威風  
 を震ふ神業大度、不思後も亦未曾有の大將軍と稱つべし、其濫觴  
 を精しく這小祝發さる。時代の文明は属する首、叡山西塔、崇林院  
 昌盛法師といふ僧あり

木下系圖小佐々木氏、木下源四郎といふ  
 氏、奉の弟小僧あり、東塔崇林院住持と注記此僧を、一昌盛の

皇言不統卷之一

巨鏡



家ハ江別波井郡長野村ニ在リ。父ハ百姓長助。母者。這ガ二男  
 小生。まじり。せ八歳。少シテ登山。ふ。利發受戒。一法。の号。昌盛。と称  
 つ。ガ。専門。深く。顯密。の法。海。小。探。入。一。事。理。一。心。の。妙。義。を。曉。  
 智。火。を。り。煩。惱。を。燒。盡。と。す。る。に。臨。昌。盛。新。小。大。願。を。起。  
 一。宗。を。興。立。せ。ん。と。興。義。の。分。別。立。さ。し。け。れ。ば。先。哲。の。例。小。憑。て。神。明。佛。院。を  
 祈。る。小。如。ト。直。小。比。叡。を。走。下。り。當。國。竹。生。鴻。一。系。消。一。の。微。妙。天。女。小  
 祈。誓。を。深。ふ。日。懈。る。必。く。百。日。が。際。歩。行。を。運。び。一。か。不。乱。小。念。ず  
 色。も。雲。霧。掌。中。を。あ。ら。さ。り。け。色。バ。こ。う。成。公。の。法。さ。ふ。こ。一。遭。發。願。し。つ。る  
 う。一。命。を。り。て。天。女。小。歸。一。死。す。と。も。所。念。を。達。せ。て。罷。へ。き。と。も。百。日。も。今  
 宵。を。限。り。と。至。公。小。念。し。て。通。夜。あ。け。る。曉。近。く。あ。る。俣。小。夢。現。る。藤。繩  
 と。珠。の。影。の。八。文。字。小。開。き。香。雲。籠。籠。る。陳。は。煬。嚴。微。妙。の。神。女。現。を

折。声。涼。一。若。さ。る。り。汝。今。大。願。を。起。一。宗。を。興。立。せ。ん。と。成。幾。一。雖。の  
 世。間。名。利。の。法。を。妙。覺。円。燈。の。願。海。小。稱。を。ず。徒。は。勝。者。を。争。ふ。の。も。  
 衆。生。清。度。の。法。小。わ。く。今。世。四。海。惱。乱。一。万。乘。の。皇。上。より。億。兆。の。民。小。至。る。ま。へ。  
 愈。く。嗟。嘆。の。苦。小。端。無。明。長。夜。の。闇。小。盲。居。を。然。と。も。誰。か。此。苦。を。救。え。ん  
 む。る。非。輩。也。今。は。も。あ。れ。四。海。を。統。一。個。の。大。將。顯。出。上。ハ。帝。王。の。御。為。下。ハ  
 万。民。の。之。め。慈。愍。の。志。を。勵。一。只。願。天。助。の。力。を。震。以。世。上。の。亂。を。鎮。め  
 ろ。ん。是。こ。そ。菩。薩。六。度。の。行。小。勝。是。一。宗。を。興。立。一。統。宗。と。勝。者。を。争  
 と。ふ。と。少。其。功。り。分。さ。る。巨。大。有。実。小。大。悲。の。願。小。稱。ハ。十。地。の。内。修。し  
 満。足。す。一。孰。汝。ガ。前。因。を。考。つ。小。出家。得。道。す。る。り。何。と。わ。ト。亦。子。孫。の  
 一人。の。大。將。軍。を。得。つ。所。の。果。報。あり。今。より。子。孫。を。起。す。の。秘。を。授。け  
 四。海。一。統。せ。し。む。士。を。求。め。ん。と。行。願。一。至。信。奉。行。す。る。時。ハ。大。願。口

満一（つひに）個の奇男（きなん）見せ生（な）せしめ普天（あま）の下と活（い）るる五十年をい出（い）る  
 うらぶ努（あきら）く疑（うたが）はるる怠（おろそ）るる必（かなら）しも法（は）とめよと所（き）く懐（おも）一（つ）バ  
 鳥（とり）が音（ね）小夢（おの）覚（さ）さるる宮殿（みやとん）の曙光（あけぼの）群生（むら）竹の玉（たま）裏（うら）ら一岸（し）うつ波（なみ）  
 の令（し）と推（お）く信（しん）を茲（こゝ）にりやまされて昌盛（せいせい）奇異（きい）のおもひをねし  
 吁（あ）あてがごや天女（てんじよ）の示現（しげん）が念（ねん）就（じゆ）の成就（じゆじゆ）する緯（いと）子孫（しよん）ふありとの  
 神告（かみ）いもさうく我（われ）は帰俗（きよく）せしむとのことあるべし先還俗（せんげん）の準備（じゆん）を  
 せんと同國（どうこく）荒神山（あらいがやま）は躋（のぼ）り断食（だんじき）ありて雲符（うんぷ）を禱（いの）て総宅（そうたく）の  
 法（は）を修（しゆ）すること二七日（にじち）這（こ）もも天童（てんどう）の灵夢（れいむ）を蒙（か）り雀踊（せきう）するま  
 心歡喜（こころは）し然（しか）るる還俗（げんじよく）しんりのこと俄（お）に狂人（きやうじん）の模様（ようばう）をねし  
 学林院（がくりん）と遁出（にんしゆ）りて故郷（こきやう）長野村（ながのむら）またち返（か）り兄長（あに）左衛門（ざゑもん）が家（いへ）は  
 食客（しやく）素（す）うや実（ま）の在（あ）る人（ひと）あはねば思（おも）はれ白（しろ）と越（こ）する俚（し）ふ意明（い）らる

跨（か）電（でん）  
 女子（に）の  
 十五（じよ）才（さい）  
 といふ

愈（い）れども比叡（ひが）は帰（か）らん氣色（けしき）も見（み）えず法（は）もぐる教（しよ）珠（しゆ）の紐（ひも）の  
 梢（しやう）も火宅（くわたく）の煙（け）は薰（か）染（ぞ）く後（のち）がらるる法（は）の線（せん）脱（だ）く疊（たた）る戒（かい）花（は）小  
 積（つ）る五欲（ごよく）の塵埃（ちんがい）昨天（けふ）比秋（ひあき）の刺栗（しりし）も今天（けふ）春立（はるた）て風（かぜ）ささるる  
 吐（つ）蕪（わ）柳（やなぎ）は梳（か）りて羽（は）立（た）天（てん）る夏（なつ）の園（お）縁（えん）は紅糸（こうし）交（ま）るあらしで鬢（も）みか  
 羽（は）卒（そつ）の鬢（も）髪（か）髻（げ）褐布（か）の袖（そで）の短（み）くも長野（ながの）の里（さと）小讚（せう）さるる艶（えん）漢（かん）乃  
 模様（ようばう）を何日（なに）墻間（か）窺（のぞ）し母方（はは）の叔父（お）称（な）五右衛門（ごゑもん）が女の阿高（あ）一昨（いつ）  
 年（とし）跨（か）電（でん）の胖（は）変（へ）て二十（に）ふい三足（さん）ねども刺（さ）る夜半（よ）の遠衣（とん）濡（ぬ）るん  
 のと磯（い）馴（な）る色（いろ）を厥（その）子の親（おや）とて子（こ）を見（み）る縷（いと）の速（はや）ければ快悟（くわい）  
 りさくや欽（しん）こび昌盛（せいせい）あらし迎（むか）子（こ）おせん時節（とき）もがらると僕（わ）そのうち  
 遠（と）よそれと誘（さ）ふ水（みづ）漸（か）ま起（た）て累夜（かさ）ふ結（むす）ぶる花（はな）も実（み）を果（は）七月（しち）の  
 さつりれ滞（と）りしことを胤（ひ）の胎（た）内（うち）小娘（せう）娘（むすめ）られ天女（てんじよ）の示現（しげん）もあるるまは



豊後地切編卷之二



昌盛法師竹生  
島の神壇小念彼  
しく天女の靈話  
蒙る圖

豊後地切編卷之二

弥助この  
始より中  
村の名  
のり中  
長野と  
中村の苗  
字の年を  
極てま  
るのち

嬉しき律よりなむきども。十月を盈る産胸の墮落の僧の児よると  
と他の祿らん朽憾さよ。這里ありて産まんよう。ひと中づ夫婦が身を  
躲し。憑人を討て産地を得んと。夜の間ふ近江を退走つ美濃路  
を過る尾列あり。愛智郡中村一里近し。知巳の人れあをけきむ。  
それを憑るふ移住。中村弥助國吉と名を華めの這郷に遊筆な  
して朝暮の口ふ糊する活計も。玉を養ふ情子一つ。左右の程を際月  
あり。家前の河高の最安と。冊湖の珠もつねに像き男子を平産  
あてけり。是文明十二  
庚子の年也蓋天女の示現ふ應じ。鎮護國家の器ふ有ぬと。父  
母の愛慈も。頃刻も下ふ安んじ。寝食の欲もらわ忘れ育つる采  
ふ年月の授より疾く歴更りて天然一個の人と長ぬその名を中村  
弥右衛門昌高とて尊号する。是太閤の祖父あり昌高も又一子を授く是を弥助昌吉  
といふ永正五年戊辰小能登とて名をあらわす秀吉公の父君あり

中村弥助昌吉仕織田家附 娶持款女

時聖くぐれが雲を芝を生せ地土うぐれが獲出ど然ば中村國吉夫  
婦丹波して男子と育養ふといふも。時機のやど熟せざるあや  
弥右衛門昌高を事ありて尾州中村自身を終れども父國吉が  
本意を守りよしく一子の弥助昌吉に教訓せしむ昌吉はついに  
父祖が青志を連継く。文武の道を業励す。別々餘劍の伎ま  
熟る。よく厥妙を鑑得せり。這事ハ稍閑き。その頃尾列の領  
主といハ斯波治部大輔義統あり。春日井郡清洲の城に在  
住して是が宰家ニ織田備後守信秀といハ武勇勝る。良  
家あり。弥助昌吉思ひあやう。倘隨後より必本意を違え  
と。備後守が居城する。古後ふ走來り。奉公の義を頼入に決然

是程の関ありしに、姓を木下と革めつて隊率を勤なり。  
 是昌吉が二十八才の時、昌吉軍に從ふごと、其身を風裡の毛結  
 天文四年し未のとき、昌吉軍に從ふごと、其身を風裡の毛結  
 ごとく、程に業て操きしる。信秀深く賞美しむ。終るに  
 一隊一伍を指揮する。大將品も做せんすと末のもし、懐され  
 けり。頃、天文九年の六月、織田今川と年楯の機會、三洲  
 大樹寺の戦ひ、昌吉先陣、馳向ひ敵兵二人、奮地、猶依せ  
 首撞破く、ち揚る。敵士つるより、それ逃さる。敵て投と三騎  
 かうち、連昌吉目、けり、搦蒐る。防げど、身も稍疲る。これ  
 怯むところ、一個の敵、弥助が太腿をきり、窮ふをわけ、突破  
 らし。痛若く堪ふ。仰面、僵り、危かりし。自方大勢を  
 あり。敵の兵士を、趕退り。漸く援く引退く。信秀とれと者察し

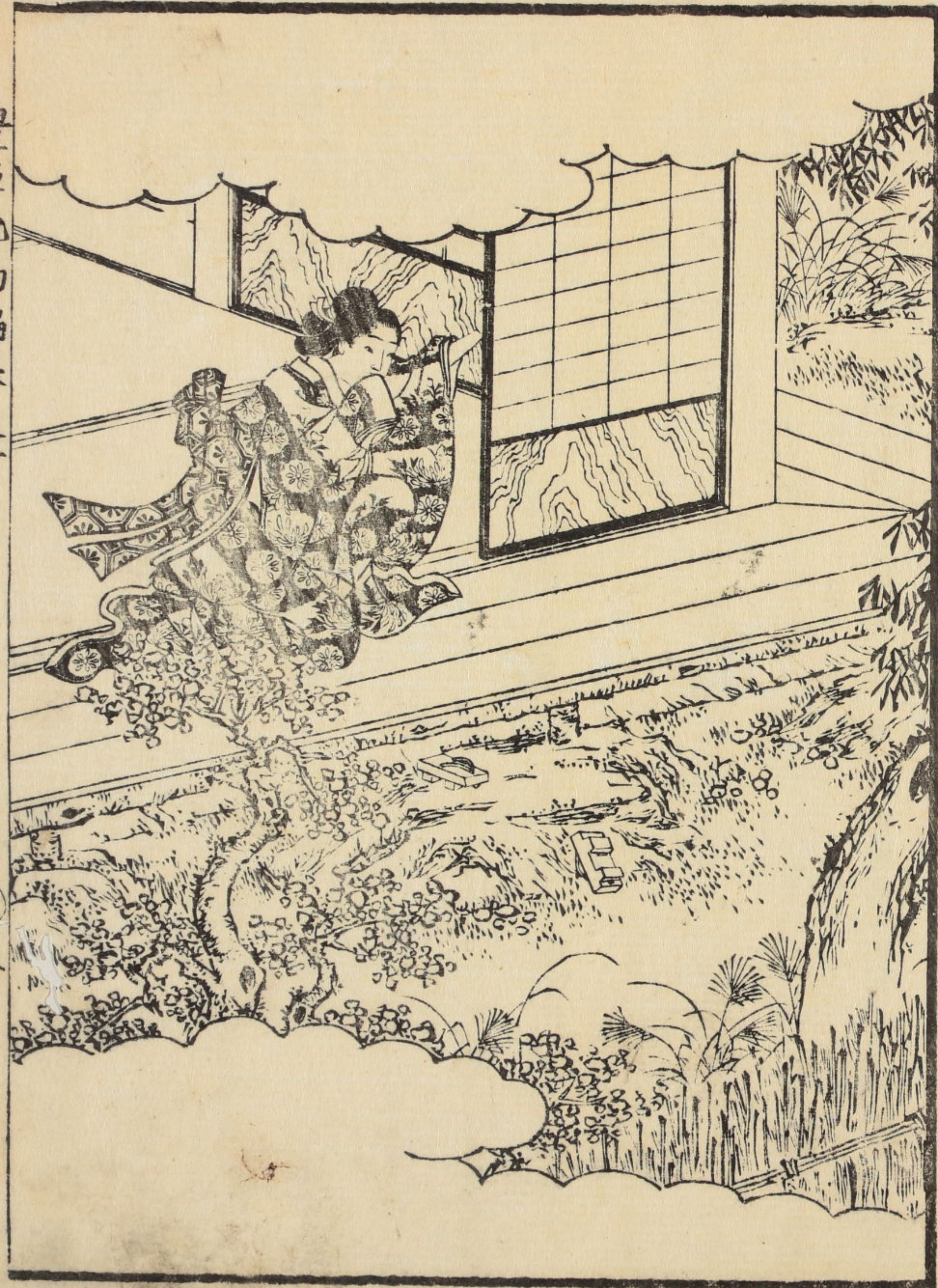
今日、弥助が操き、比較したるを、感賞し、一、二、竹流りの金、あり、賜る。  
 疝養生を成させ、然るに、遠廢骨、おかし。思の外、深徹し、  
 金瘡や、や、愈るといふも、右の脚、膝、腫れ、屈伸、素のごとく  
 不成り。歩、自由、ふる。ざり、ければ、憊て、奉公、といふ、ことも、武功  
 と露、こと、一、念、の、残、と、故郷、中村、不歸、去、來、塵、  
 て、食、せ、山、も、喝、さん、傘、も、被、て、彩、水、の、加、扶、ふる、骨、作、り、轉、轉、  
 飾、を、繕、ふ、も、咱、身、を、懐、ふ、千、擘、竹、皮、より、別、き、巻、紙、小、世、帯、の、油、や、藪、糊、  
 汗、を、混、一、煎、油、を、刷、く、檐、頭、の、日、小、曝、も、ころ、の、天、晴、天、下、さ、子、が、に、豊、臣、  
 関、白、父、の、業、を、知、れ、け、る、茲、も、荐、び、新、井、さ、ら、這、木、下、弥、助、昌、吉、  
 家、荆、の、姓、條、を、鞠、に、下、中、村、船、治、五、郎、助、が、姪、なる、の、  
 其、し、於、仲、と、呼、つ、る、が、心、軟、和、賢、く、て、刀、尺、經、緯、扶、枝、を、他、も、勝、る、て

豊臣記 神編卷之一

五

一書、海東郡、津島、の、生、人、  
 とい、下、中、村、首、や、あり、や





御器所の  
處女  
春情と  
濃やう  
納言  
保廣御の  
秋心を  
慰補  
せむ

哀色果あく卒去さすも憐る憂こそありぞとも。かゝる尾張の御器  
 所よ。今更や違ひれ人もなき。聖皇夫や便宜もあつて。咱の替はらね  
 ども。慈惠を分らぬ幼女を慈しむる小月超て待甲斐もなき都乃  
 芳純もなき怖らぬ僕情の妻らさあふりのあへん。那中れ這まれ  
 付後く。物の要否訪もやと。二歳の女子を昇抱き。脚辛くと登りそ  
 見え。嗟あどさうに彼卿の逝去させしむひて。今天もや初忌日墓  
 所よ。桃李紅白と雜て故と捨るも。ある冷者の艱さ難さ。あやうふ  
 泪も成らじ。ひ咽堪ふ血を吐き。偶歸洛の期を後待つ。嫁しと  
 思ふ。詮もあふ早世し。あふくこさよ何は憐へん。母子が身のうへ登  
 の燈秋の扇。それさ便いあるりの。或別く不便。這娘が果報つる。見  
 憐ふと樓抱つる。ぬ悲嘆ふ伏枕む。埋せめて哀色なり。別去果べき

憂あらねば。漸く此蓋所小啼りぬれども。女の胸のよあて。此哀積る病  
 とあり。程さ疾生む。黄泉の街の鬼とあり。果うを。父の次女。支洞と共ふる。或  
 擔み。是と蒸り。孫ハ養ひ。監ふと乳し。一あ年を過せり。世の理の生  
 者必滅。老病命を俵り。来て次女。夫も亦耳順の秋。茶毘の畑。小終を取  
 幼稚の女。が憑きもあつて。叔父五郎助が憐ま。あひ名を。が於仲と称る  
 一。う。咱房ふ。争と安つる。を。媒物結する人ありて。於仲女十八歳の夏  
 此末。木下弥助が妻と。あしけり。是享禄四年四月のこと。を。とぞ

日吉丸誕生於仲觀音瑞 附 神童生長

陰陽和し。あふ。く。後小雨澤降り。夫婦和し。あふ。く。后の家  
 道成ると。木下弥助昌吉ハ。於仲の房を娶て。より。好合こと。膠膠の如く  
 比目。鴛鴦も。あふ。を。さ。り。し。が。其。強。く。あ。ま。ち。見。え。妊。娠。の。如。く。あ。ふ。く。



茲は安産ありぬるハ、憑むハ甲斐守の女子なり此女子ハ後ハ長尾武藏守の妻

天文三年 昌吉更ニ喜びを嘆息もなき出産す。父祖の遺言もあるのぞ

懐胎を落ししと心もいささげは見えける由妻も死面目あり幸

希男子を婉るゝの。這村は鎮座すしける。日吉権現へ誓願をじ

藁砧は知れせむ日未し信心懈怠ありしが於仲の方が或夜の夢

日輪飛で懐入るるとそそのめ天より身の平生ありぬやう不覺え

昨天ふ更る食擇ふ正し新念の發あり日吉の神は雄兒を授

けふふ疑ひふしと夫昌吉不譚まば弥助の听くち歎び父祖の

遺言の志るとそ這遭孕胎一子ふあれ呼娘しやと佐備一斎りの

いそりて禍災を防ぎ食の切目を正し席のひかある並居らば

心を丹誠と臨月を十月とそ算れ然ども不思議や出産の

身もええべし十一月過すもまご氣色ぬし十二月回ハ極月

にく世間ハ恰も湯の沸く像く奔走殆忙し昌吉夫婦ハ只管

不出産との後らせど又小燈のあつれば佐備ハ呆て怪むる

新は来くる春の日と関り塞ぐ緯さるるねば青方の年途へと

軒ハ葦索の備飾を設け床ハ幸業つむ五幸盤道祖の

柳雲壽金ト巷さへ見情く洗清むる所思にて爆竹の火ハ除々

の園でちりしと最賑り。憊る機舎く弥助が妻頻は産の

身をづき。吐の痛その尋常ありぬの備こそ得らうと昌吉がまの

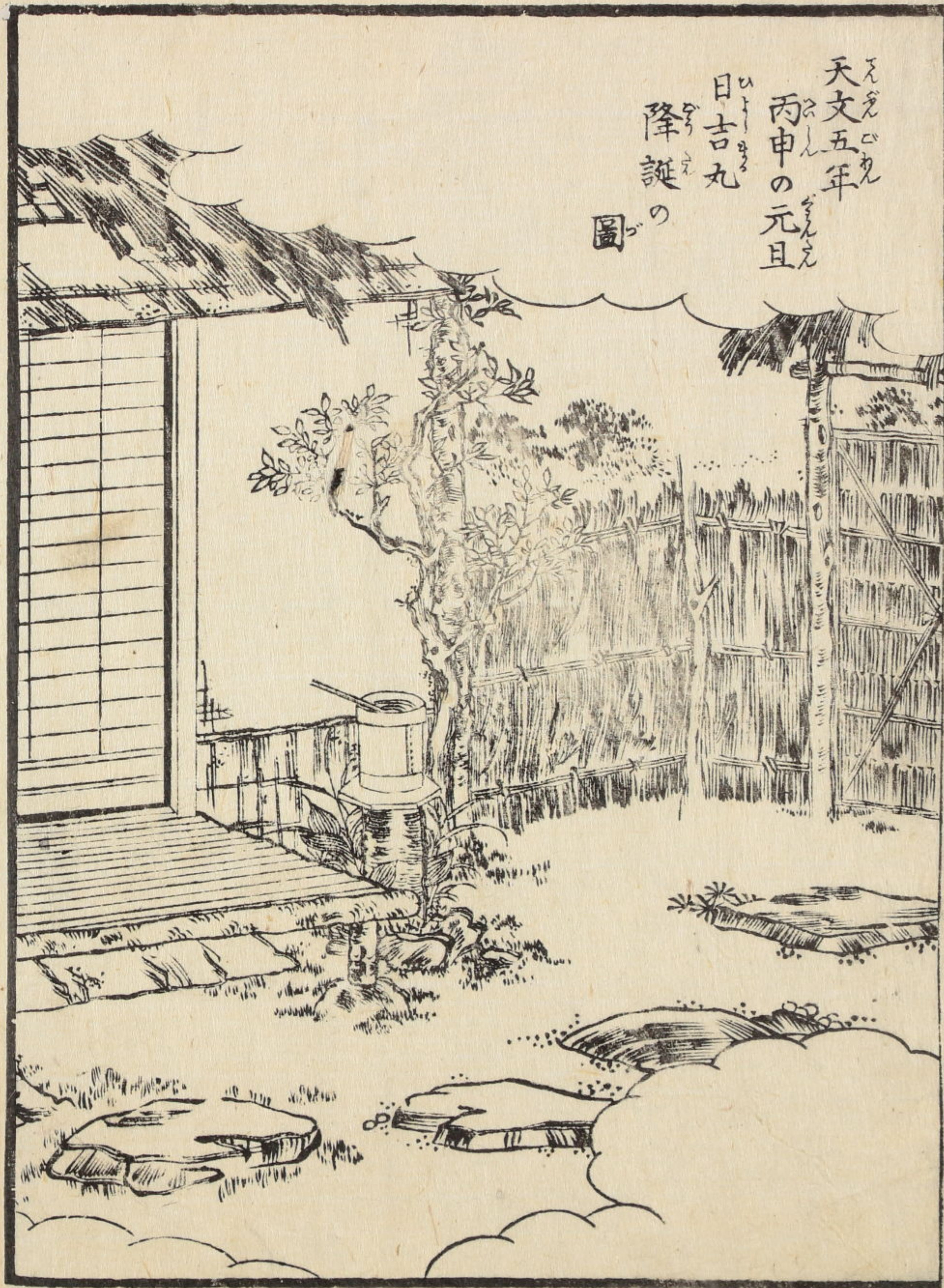
氣呈れ踏度も忘色。内叔外族を召集し準備して待たどこと

あま殿朝晩と老婢が告。疹と流る月血と共は呷く暗くと

泣初声の世は听達し方は是天文五年丙の申正月元日寅



天文五年  
 丙申の元旦  
 日吉丸  
 降誕の  
 圖



の一點扶櫓の天地再開の聲音を這ふ叫初し。祝足かりける歳且

あり按ずる小豊鑑並小豊臣譜共天文六年丁酉誕生とあり日吉丸は猿子 茂小一の美瑠わ

で以兒遠小誕生一夜より。弥助が家の棟更ふありて彗星小像ありし

美星爛くとり出現あり。外面ハ恰も白昼の如し。日吉丸生長の後戰場ハ

以皇太閤が陣上ニ現るるを恐るる所ハ忽ち然るに這兒異相あり。顔色頗る赤ありて

軍力ありてむろくを勝利を得ることを射るが像一堵を

眼ハ宛猿の如く他小向一を光ありて。脱くあること射るが像一堵を

瞳ニあり左右の頬の尖あり五の黒痣顯きて九夫とい見とるけり

又母のよほるびりも鈍けり。以兒を獲るるム叙。日吉の神へこれを

祈り。かり日掃の瑞夢を得るれば知名あれども擇べとて日吉丸と

を決号し。然ども此兒がその相貌猿小似るを近隣の老お

とわく混名して日吉ハ呼ぶを衆口ハ猿之助と唱雜ぬ後ハ父母

さそれありて猿よと呼ば我号し。名得點頭とらふぞ理ある已六七

歳小長一以の形へ年より微さけきども。心性飽まで大ありて隣家

の兒童と戯遊ぶ。嘗て他の下はまゝと。沙鬪るを混挑と。角

能石投狗争。更に諭する緯るけき。満里拳く日吉を憎む。顔も

性も実小猿あり。新の緯るき見あぐりも。親なればこそ愛がるよ。と

嘲笑ふ。昌吉夫婦。夙小それと所若つ。猿のふれ棟書小登山さ

せんといづき。母の於仲が従弟する。源左弟門といふ人の清海明神坊

小住ぬる。這を憑きて堂津ある光明寺。時宗の精舎へ意飾る

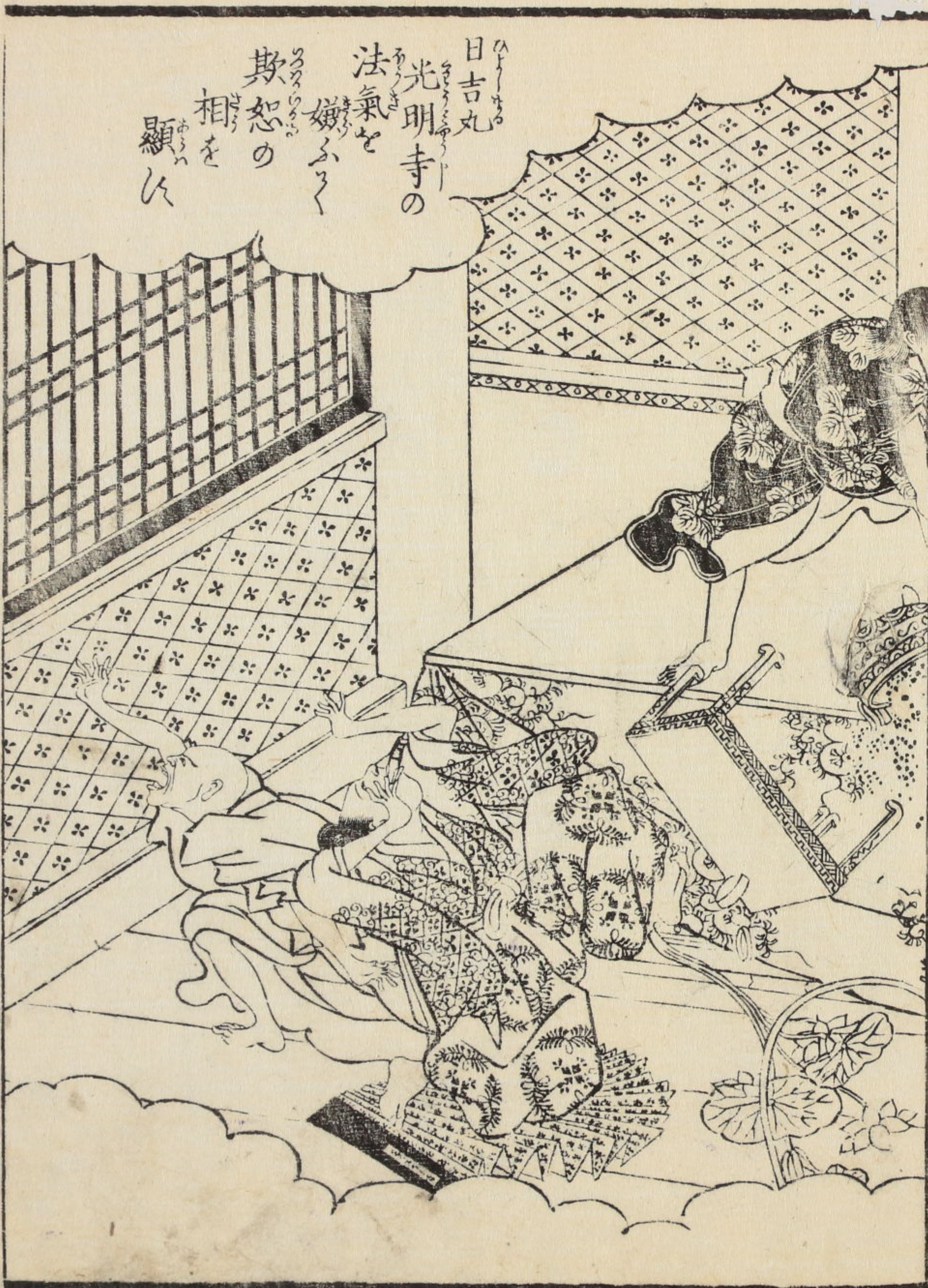
るに遺し。是日吉丸が八才の時あり極ずる。他虫すて光明寺の

師の上人。塾日吉が異相を親く。這見うる。得道まぐ。別老のし

と賞嘆有て。續書学笔教へぬれども日吉丸これを嫌ひ曾く机牙

倚る續く。瞠る有ハ外面へ走奔。兎輩を集て竹木の應手ありせ  
 振散し。合戦ありと喚起つ。つらも自身ハ大將堂。堆立不立跡影の  
 空響ふ指揮あり。遠くあふ奇中の僧徒。日吉丸を借有り。志  
 むく。河徴ととども。毎口賢く返答して。責利こと毎く  
 あり。ム半ありて朝哉若狂心の随ハ勃静けり。是ハ十二歳の時あり  
 とや。彩ハ法率の式ありとて。伏物で奉堂へ運ハ中央机の前  
 へ。十方不背の佛ハ對し。子ハ他の苦患を救。本於ありと  
 所つるが。憚中を蹴踏つけり。疲きも一亂も志のらん我齋来  
 せし。伏餅で服せよ。傍々若采得させんと。大音声よのしど  
 て。志むく。看護り居り。頃て洞の燭臺槍把らん。弘院  
 の刃せり。我伏装をば受ざるハ。奇怪ありといふ。采ハ燭臺振

揚撲他とらつ。年最古き本像の何れありて持るべき。後光四方  
 散礼し。弥院の御首の合本の膠。難きを瓦落く。碎り。這振着に  
 法子難まふ。ふごとく。ゆと。証来り。這所居るより。驚類なり。喚りつら  
 ねき所見や。猿めが大夏為。養し。い。い。做んと。衆口ハ惶惘る。法  
 子。おれハ。劇く。和尙ハ。告あり。上人も。赤。孩。き。の。弥。院。堂。上。ふ。走。り。来  
 也。這所為を。んを。稍。才。胸。呆。て。辞。も。あり。う。う。や。や。黠。念。し。を。り  
 つ。日吉丸ハ。宣。ふ。や。う。奉。考。を。被。却。し。なる。そ。罪。勿。論。わ。ら。う。う。ん。  
 呵。り。に。途。を。滅。る。に。出。を。絶。を。失。ふ。う。唯。這。う。ん。の。う。お。せん。快。親  
 卷へ送り返さ。禿引の人を招けと。明神街ある。源光弟の。是をよび  
 よ。日吉丸が。所。作。格。り。所。せ。這。見。奇。ある。生。ま。り。し。く。四。五。年。昔  
 育。せ。う。も。憚。く。勿。々。力。暨。を。ば。一旦。ゆ。ま。う。に。ま。う。采。来。ら。る。も



日吉丸  
光明寺の  
法氣を  
嫉ふく  
欺怒の  
相を  
顯ひ



静まりろわび、これ復教化を加へもせん。と最慈に説ふ。惟子病ふと  
て、既へ源左衛門ふとて、これハ為後多の精舎を下り。日吉丸を伴  
ひて。明神衛へ侍来り。種々異見を謂き、世怖の簡一の品を之  
深切りて日吉を勞り。志あり。清洲止置ぬ。方僅源左衛門が  
日吉をりて故郷中村へ歸さぬ。所謂ハ這鬼登山せり。その後  
程さあ、之實又昌吉は此病て卒去しぬ。後ハ母公が枝冷獨よ  
て。四葉の女子を孕みしが。斯くの活業あり。巴くそ筑阿弥と  
し。亞姻の藁砧よその身を、再懸り。幸に後世のやうや  
あれ。方僅這日吉を懐く。親が子許へ返ひとも。継父の所懐  
宜しと。恁の計らひつるものあり。既十二歳あり。もうめるか。ハ  
のまを久放胆さす。べき日吉丸が為の為る。と源左衛門ま

肝煎して這家よ那門と奉公不得仕すれども、一旬と勢、勢  
返さる。緯三十八度遠遭ハ刺固主と、鬼め勢めさせん。と懐ふあり。  
縁者ありける。番匠の勤云。清といふ者あり。此を倚因。又長  
牧の茶碗師が許へ使し。日吉が形容醜けれども。利口察明  
衆に超。主人の心を快悟。一月計ハ陶器の技を大暨わが之  
り。是よまも、憑を降く。御疎まら。召使ふ。然とも大器の  
日吉丸。既這處も厭食却。次第ハ在放し。遊び。遊び。遊び。遊び。  
家内ハ在ら。ま。其まも。案ハ想違。教諭し。ま。ま。耳  
あ。停め。漫。道。遙。け。ま。持。刺。し。法。三。歳。ある。鬼。の  
者。獲。せ。彼。り。が。這。ハ。發。興。し。一。日。負。つ。抱。へ。弛。あ。る。に  
それ。さ。厭。食。て。噁。右。流。左。流。お。忍。む。緯。を。あ。れ。と。背。門。あ。る

井戸のりといゆき。草りて交る索捲捌き彼幼鬼を井掛  
結糸。稚子よ稚子よ辛抱やね。頭て解えて得させんこ  
し言葉遠を私奔る。東を指して趣きりり

日者九去郷據身峰須賀馬 悍智奪刀

鴟鶴いりて雀栖又接らん哉。然バ神を日吉九八速も長牧の  
陶工店を私奔る。靴を穿て走るやどに其日の全く暮るころ。  
古河ふ来りけるが。生来曲邪かまけき。一紙一紙も私せぬ。今日他々  
ふ入れバ二碗の飯。隻足の鞋。孰も向ふて乞討むき。増てや今宵の  
接宿を六いりて。や。赤凌ぐんと東者酒見つ。古河より津橋の  
方(田んぼ)を。茲ふ海東郡峰須賀村。郷士あり。名を小六正勝  
と号て。義勇ふ志。まをり。鉄石の如く。峰須賀一村三十石の民ふ

まをりて。赤凌ぐるといふといふども。掌る。踏套の形状多く疎衣  
席合して身を操業あり。孤獨塚の者。憐れ。寡人亡まじ  
接宿る。き。接倫を歩ひ世の亂る。影をま。小要ひ天下の活る。ん  
緯を思念し。英雄を哀むること。教百人。山郎野夫も。これ。暮  
ふ。此。逆。郷。は。住。り。の。い。武。を。好。む。と。考。ゆ。り。然。る。に。中。村。の。日  
吉。丸。早。く。も。小。六。正。勝。が。義。勇。あ。る。と。傳。へ。路。を。返。し。て  
峰須賀村。入。身。を。正。勝。に。投。じ。り。小。六。原。素。友。と。交。る。の  
深。秘。を。得。る。英。雄。を。捧。ぶ。の。形。あり。今日。吉。丸。が。相。親。を。親。く  
忍。葉。す。る。と。淺。く。は。現。ふ。此。鬼。是。異。相。あり。凡。下。不。屈。す。る  
事。あり。と。欵。待。と。懇。切。あり。夜。と。り。日。と。ぬ。く。軍。堂。り  
隣。を。交。る。小。六。正。勝。最。も。賢。く。正。勝。の。逆。ぎ。る。所。多。し。或。夜

智恵競し遊びたるが正勝おきていひたるやう。備中安土  
 谷を北膳さへ汝が望む物を與へん意得とも同答するに  
 日吉丸勝せゆら。小太中しく感伏し。汝が欲しき物あふ  
 是と望めと祈り日吉丸。吾長牧の陶家を出て武士ふあら  
 まく思ふといども。刀一口も持ざる代羞。怯まされあも一刀を  
 賜へよと所望せし。正勝祈りりともあり。夜ぐる刀を給ん  
 と。首尾稍二尺たりありけり短刀を賜ふ。日吉探ておし  
 ざら。割てこれを試るに。銑毛細くしててんをいれれば再び小六が  
 手に推抜し。これの銑味鈍くある怖く。吾望の刀を賜てよ  
 との。正勝心悟る思ふ。初め誓へ。詞もあれが左右を賜り汝  
 が望む刀のり。是れおむい。望むが即腰に帯る刀こそそのそみ

あれと祈り。正勝大お刺さ。是の子子村正の鍛錬しして  
 我家の家宝の刀なり  
眞書小青江村正とある一より村正の  
家小青江の氏曾てなけり。其書改む
 報し。與るに最難し。餘の刀を六望まれよと。智せも果だ  
 日吉丸首を左おはし。主人の詞とも覚えぬりの。最お約  
 せし。詞も。吾も勝まが何よまれ。歎き。汝は構へんと。官ふ  
 舌のまご。能ぬ。約を交むることを。道る。ね。頼り。う。し。じ  
 と。面勝。たる。我。正勝。する。に。迷。惑。し。いや。と。よ。刀。を。情。む。ふ  
 わ。く。は。汝。刀。の。事。に。泣。く。汝。の。そ。え。我。は。隨。ふ。士。準。軍。か。し  
 あ。ぐ。これ。を。所。望。と。い。ども。吾。嘗。て。賜。ある。こと。知。し。然。る。後  
 今。更。汝。は。附。ふ。せ。ば。多。くの。後。士。の。意。を。損。傷。ん。是。吾。大。なる。處。り。  
 然。ふ。より。七。初。の。如。く。賜。が。う。と。い。ひ。つ。る。り。の。り。誠。に。欲。ふ。は。依。り。本



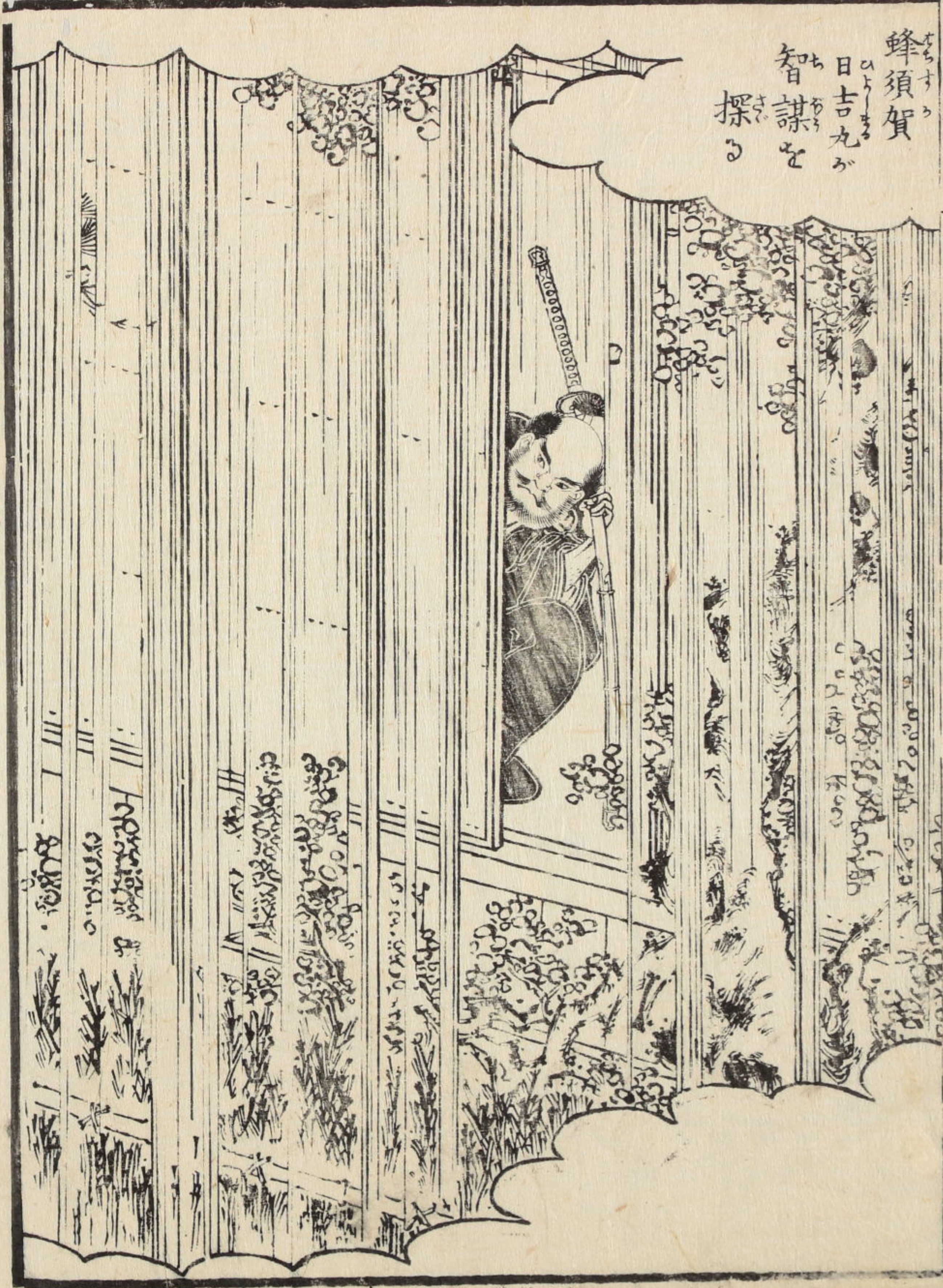
高綱が生念の馬を得しごとく。吾不知きば取よじ熱くを  
 階人の恨もあく。吾推も遠いごうけ。那般せよやと所く  
 よりも。日吉丸大不悦びいづにも是下の知ぬゆ。其刀を取  
 得べ。洞を連夜中へ侍をさ。固く物しと座を起ぬ。正勝  
 者秋の日吉や来ると村正の刀を枕下不置。熟睡したる  
 態よりて返。待ども日吉の出来らば。其翌日も眩近く。刀を懸  
 て待けるに。是も所ことほ。正勝日吉丸を呼出し。いふれば  
 約せし刀を取こと違ひ。と信てつる。残日吉丸。獲て取しき  
 不。熱中熱腸せよ中ふかといふ。否これい違ふわねど。猫の額  
 ある魚と氣が現ふ。髪髻さ。眩して取ざるにやあらん歎  
 としむるも。達日吉丸大に開く。物笑ひ。氣よく取。猫よと

賊。ゆせんか。あまふと。洞を退出し。尚秋の甲夕より  
 雨跡く降く。戶外寂莫と東ぬ凄く。小六を中ふ今宵こそ  
 日吉丸が来るらめ。来らば手痛く打擲し。懲しるまんを  
 公せらる。今もやと待りどに。稍子の下刺と覚しき。と為。  
 擔濁の下ふ人ありとわがえ。傘ふ雨のあふ。者頻り。備を  
 後面が潜来り。寝息を窺ふにこそ。と息を過く待隙し  
 夜の果くと曉物より。然ども雨の控。器を正勝に志志く  
 預り。後何とて氣の長に。今猶戶外不寐ふやいと背懸ふけ  
 する刀をこまむ。刀架のそ空しく。残りて。村正の右刀の見え。は  
 是のいつにとうち。驚き日吉丸を顔へ。海ぶ。日吉丸これ。よ  
 が。小長き刀を前。出。正勝が。出来り

聖旨言不録卷之一



蜂須賀  
 日吉丸が  
 智謀を  
 探る



所望の刀も入る悦び得るはと云ふ。正徳感下る面も亦て  
 いらぬも早速方洲よりけり。我權滴の傘の青ふも奪られ  
 刀の守りに斷断ありた。賢くも取つるりの感するも從餘り  
 あり。今の既愉快附與と云ふ。と了得る智勇の正徳も亦せ  
 冷徹して感佩する。熱く日吉が器量と慮ふも年僅小十三  
 にあり。那許播磨の智略を役け。大丈夫として感感せしむ  
 る不思議の舉止。是凡生の見あはれじと。未恃りくむ  
 一。愈親しく交情する。明は天文十八年日吉丸の他念  
 あり。蜂須賀の家より年を起て。十四歳とを長よけるが。霞  
 風雪霜二回り。居然と此の邊るといふも。遠もあぬ中村  
 まで母公の愛も知しめず。日吉が緯の瞬息もと云ふ。

思ふく忘れおを。空暖飽飢の時よつけ。妻児の奈何と憂  
 つる春よのなれと被ぐま。夜は垢あや泥つらん。頼まれ指し  
 色懶放りて。寐眠は悩まやせん。只それのそふ他は又瘦る  
 して患若や做つらん。乞丐見るとふ勾引やせん。那もれ  
 遠まれ素く。速く故郷へ歸きり。嘆歎見ぬ慕しや  
 と失婚は孫を愛若の泪の年の南とて。時を過りて若者  
 形うらた

日吉丸一遍還故郷中村 附 求食老波  
 靈泉の音も隨ふく清冷。賢人の用ゆるに信せし智現  
 小日吉丸の長る就て。智慮遠くして痛が如く。既此年也  
 天文十九年と云ふりけり。神童長て十五歳。執田の宮へ

祇寮せん。蜂須賀正勝が家と縁は宮小朝とありしが孰の  
 へ知らざり。唐呂よ磨よと名のあり。唱と應つて賤ま  
 匠風き一個の健命腰の鉄尺挿しに別人なるぬ番匠首青木  
 勘を傍らうけきよぶ遊小ひさうた対面を飲合て側なる茶店の  
 榻小企く船ひ過超天の始終。同の細まの半胸をうり禪ふ  
 うちの勤を傍も顔て所る中村の母が勤善麻呂をのと據  
 船ひ在縁と源九郎のが治る小所。一旦故郷へ帰れよ。とうも  
 同伴て蹴来つ。源九郎の一告けるに。同トく悦び日吉月遠て  
 今まを情願契ふ結遊して正勝夫人小恵せられたる由を告げる小  
 源九郎のいりの末敵を蜂須賀小六の許にいり。日吉が遠か一兩  
 年昔育せられ。恩を謝し。且へ實母の報ひせりと。服の縁

ととけるに。小六正勝後ひ細中。渠小人の先年米乃の杜より  
 伴て我彼よ止安するのを原主後といふよりあつた。却て我こそ  
 彼兒が智略を借て名を得たる事ども多くありぬるに。恩を  
 どのを五分又分あり。是下い兒が親屬あるべし。必を互に討ひ互に  
 二日吉九の凡人あるべし。正勝もどハ凡指へも。既ぶべきとあり。は  
 是下あるべし。介意しても。日吉が陶氣ハ遠くは。所不思議多小人  
 やと。味は。今訳しければ。源九郎の愈悦ひ。翌まけて。蜂須賀の據を  
 左右の遠去つ。途急を我宅に還ま。勤を傍らもま。未合せ  
 我。今日日吉と同道し。中村は伴。社母は遠せ。女途を。彼亦も  
 継し。内合といひ。再遊の思もある。縁なれば。被害ある。清洲より  
 置る。陶器と。たむ。強ての特。時境。近來。清洲の城の着

清は管下り一掃されば同職は與方出のり者あり。渠はうて城  
 勇清の小株小容まんと相憚り。日吉をりて棟梁の與方  
 門が方遣し。海東郡三寺村大工左五左門と云者あり。福嶋市松正前こまきまの  
 實父と云とそ友のいもゆと左出のり人あり。度清海の  
 勇清ハ器も火巻のこころあるに生憎工匠を任より。日吉の勤志  
 ぶふあふ雇役を最中由志日吉丸が来りしと與方出のり大のり欵  
 食餌を贈り役は充日く之時不使つて厭奉止と試りに平生の  
 随氣不弱て易り八九十人の食物を刻限連て齋運ひ湯水の  
 加減も大勢の氣は協中。拙きけは與方出のりふも更之あま  
 の匠倭推總て斯ハ珍りき見曹より。坊に形さ微さければ目より  
 鼻や抜つらんと或はつ襪の淡まきとされ曹ふ愛勞り匠殿  
 使役せり兼て勇清を奉りす。部を眾も日吉を見徳り様よ

様よと喚合し。作らむどて在けるが。爰に石見何某とく。  
 假敵の内小傑を尋。勇清の日記を書りあり。日吉は素より  
 大肝なれ人を人とも思つて。石見が座を小突とをれ備へ。藤本  
 筆法より東宛書とす。小件りも。知り賜るものゆゑ。石見  
 石見莞尔と笑ひ。いつあも阿茶が謂者。ある大名の御  
 大筆紙を執筆と稱て多くの扶持を賜らうと。所て日吉  
 ハ層て同かり。而其扶持の奈量あらん。いつあも我の二百石所  
 銅と云ふ。日吉再之同る。方僅遠勇清小園の大工倭これ  
 賜り扶持米の那計出。玉ふよと。謂はる見のりも。覺を熱ハ  
 勇清は園の然工夫大匠左完。材司を交へて二百人餘と志し  
 た。其米約莫二石ぞといふ。日吉の胸裡小算破。然らば二石の

米を都合て年々七百廿石。丈人の嘗て河知約より。二百廿石を平  
 多し。那計の御修行せされし貴書が五百石と云傳録あり。練筆  
 などの做ぬことあり。と嘗て鳴してぞ嘆あり。石見の満面小末を流  
 ぎ。勃然と怒り起奉り。悪き小末が難言なる。武士を叫ぶ不審の  
 奉止。自討のつめ小末首刎ん。覺期をせよと刀の鞘握りを見る  
 より日吉丸。鼻息嘆く。健ふ。走出とて撞憤り。奥左衛門を呼ぶて  
 是れ小條の猿めを殺せ。来よ。然るに於ては那方を。常人おせんと敷圍  
 せ。懸象の職人。氣持連子。口を破くと。勃解收られ。漸めて石見  
 何某。怒り鉄めを置置り。當日も申付を報せおし。奥左衛  
 門の小提り。小提の面拍鳴り。部下の諸匠引揚り。日吉丸をも  
 伴ふて。自宅小還り。種く小。城内の律習性。子程て不鑑做幾と

おと教訓せし。或日吉丸。否。今日古学が腸を断し。心の涙  
 濺。我彼一士と烈せし。こめを懐ふ。異見なる。大工の扶持  
 小既且。と。憎しを怒り。那計小刀を打。兼し。取中も。是  
 らぬ。武子と。虚嘯く。笑ふ。あり。奥左衛門も。已然し。恁て。以。後  
 不禁。密あり。如。去。清。之。返。に。如。ト。と。早。送。戻。し。けり。如  
 去。清。も。亦。為。り。源。左。衛。門。も。若。う。し。ぶ。其。さ。入。方。僅。ハ。異  
 事。獨。り。中。村。一。伴。ハ。往。流。阿。弥。が。絆。送。達。け。日。吉。が。事。も  
 俺。們。が。許。不。遂。也。も。及。ぶ。と。断。言。い。て。還。去。し。流。阿。弥。も。不  
 仔細。あり。て。異。見。も。如。を。吐。り。も。せ。ぬ。也。母。奶。獨。を。惱。し。日。吉  
 と。執。り。や。憑。倚。ま。ん。と。案。ず。る。う。ち。は。不。本。氣。の。恙。合。ト。郵。に  
 づ。批。活。針。叔。父。又。弟。也。が。實。子。よ。五。節。作。し。の。小。姓。年。子。あり

母とい後弟同跡つるが。渠とて憑て船泊りとも習ふをいと  
 遣つゝに四五日許の風箱場まで指搦のごとく搦けよる日浅  
 ゆる修る厭合せ生ト。狂出しく家より杜らむ亂れは草葉  
 しくて支ぬり食ハ忽然とて奔放をふ五郎作が妻もいとく  
 果き后日の館に入進もせず。外面門にて款待をぬふ日吉も食  
 時よ返らざりしが。這一條の場は粥と禪を添へ一脱あり念ト  
 中村ふ果貧しくその日を渡る寡女のありけり。親の侍人  
 地もろけきハ那の外田なる室地を借へ結着舎の蓆壁を起  
 休又安らるのそ活業更もろけりのう。婉室の陶器とて計生  
 とほいふ糊する。老婆るれば日吉丸が生れし胸も定て介抱は  
 たりけん見惚て語交せしと縁とありて遠舎へ立寄り室をく

あつた餐あつて施ふくれよと後訓うる老婆女の日吉を憐て  
 快若く肉一唱容。爐辺の圍坐ふ安居らせり。土卵の渡りや  
 撥暖め。午食ふ炊し麦るれば其中外針冷もせし。延慮な  
 せむお欲きやと。喰べむと外面削し。椀又去るう炊盛のす  
 志の松葉は百倍せり。懐古は准臨候飄舟は餐を求乞し  
 も。這有様は髻髻より。日吉丸いらち歎び呼味高き塩梅よな  
 芋さ入圍の土節とを頬も立断る思ひぞ做など。礼も進後打  
 混る。鼓腹する中を喫しとつり。喃阿姥我程ちりきに立身せむ。  
 方僅施與まきし食餌の報一粒せりて万倍も成しと返すを得  
 へまへといふを光婆の禁戒て。吾とよ老婆女の足下が報謝せん  
 と懐ふく施食させんや。以後とても我生心の言他人ふかふるむ



日吉丸  
 飢渴を  
 覚えを  
 端なく  
 扶妊婆が  
 兼飯を  
 甘んじ





謂之いひあるま程人まなりとい穢けるどうとい洞く静まふ教由ま六日吉い條ん次  
 單つ整ます。斯く謂い祠まの所ま悪くが。以い後のいまぬて謂います。然しかれど余の  
 悔あみぬ言いつるのよにい穢けるま法の。礼い舒の續つける。這あ舎を立まいを。  
 陽ひの昏る天こみ部他が住す居ぬ一のりて休しらるといを。斯くふ江州大  
 上が那の。多と賀のの神ま社のの供づ僧る。觀く音ん院を。此この方といへる  
 たり。關あ東のの國へ配れせんといて。這あ中村の弟つる駒俱ふ休れ  
 る僕が。時と疾は疾で後に違わねば當の代の奴や雇と。付くるよしを  
 五ご郎ら作し着す。這あ俱せんや。日ひ吉は訊ひ一の議を及つぎに唯ひと結  
 ひの日の中に旅を整ます。此この方に後せられ東國とをりられ

繪本豊臣勲功記卷之一了

